

SDGs 国連が2030年までに解決を目指す持続可能な開発目標。本稿に書かれた目標は「天然資源の持続可能な管理および効率的な利用を達成する」。

佐藤茅葺店

古屋睦子さん



身近な草を刈って
屋根をつくることの

面白さにひかれ、秋田県横手市にある佐藤茅葺店に弟子入りして5年目になります。春から秋は田の仕事も行い、稲刈り後は雪が降るまで茅を刈り取り。冬は雪のない地方に長期出張し、茅葺屋根職人として修業しています。

田園風景の象徴である茅葺屋根はほとんど見られなくなっていました。住人の高齢化や「結」と呼ばれる集落での助け合いの文化がなくなってきたからで



台に茅葺屋根を載せるもので軽トラックで運べます。リゾート施設からの注文や、特注の小屋の注文など新たな展開が生まれています。

茅と呼ぶのは屋根材料になる草の総称でススキやヨシ、ワラなど身近な植物です。近年、材料も入手困難になってきていますが、幸い私たちは近くに茅場があり、ス

茅葺屋根を残したい

す。また、消防法の規制で新築の茅葺屋根は特例以外認められていません。

「日本の風景に茅葺屋根を残したい」と、佐藤茅葺店ではいろいろな取り組みをしています。事業所の敷地には小さな茅葺小屋が並び、風景になじんでいます。身近に感じてもらうため「運べる茅葺小屋」も開発。楔で組み立てる土



佐藤茅葺店が開発した運べる茅葺小屋

スキを刈っています。稲わらも田んぼで取ることができます。解体した古茅は粉碎して田畑へまき土に戻します。自然のサイクルで循環できることが茅葺屋根の最大の特長だと思っています。

草が屋根になる面白さを子どもたちにも感じてもらうたくて茅葺きワークショップを行っています。昨年からは有志が集まり実行委員会をつくり、さまざまなワークショップが集まるイベント「つぎなにつくるうー」を開催しています。子どもたちが選んで体験し、楽しいと感じて将来の可能性を広げる一助となればと思っています。これからも茅葺きの面白さをたくさんの人と共有し、伝えていきたいと思っています。

※この連載は、NPO法人JKSKによる『結核プロジェクト』の協力を得ています。